

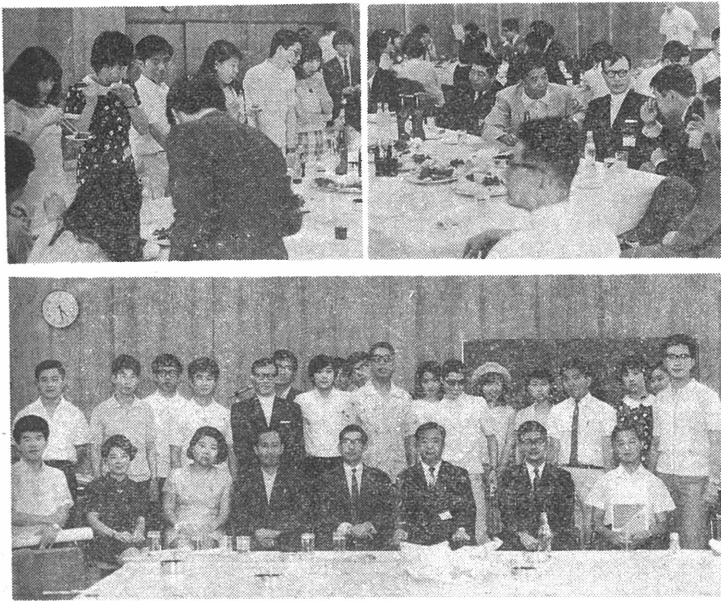
いずみ会々報

第 16 号
昭和 45 年 6 月 7 日
発行所 いずみ会
東京都練馬区東大泉町 380
都立大泉高等学校内
編集 発行 いずみ会々報部
印刷所 (資)渡辺印刷所

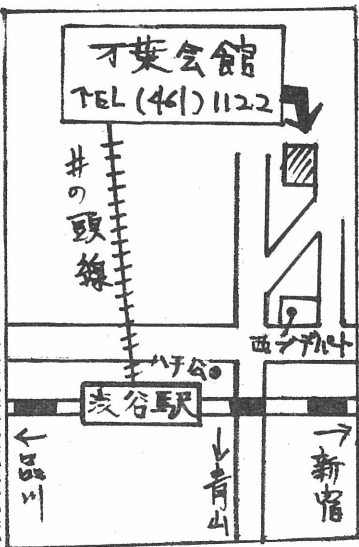
総会案内

6.21統一集会に革命的成功を

昨年度総会スナップ



会場地図



総会 !!

思い出を楽しむべし

6月21日(日)午後2~4時

於 渋谷万葉会館

天平の間

会食、ダンスなど

バンド生演奏あり

会費 高15期迄千二百円
高16期以降六百元

なつかしいあの娘が
意外に美人になっている
さそつてみよう!?

両角校長逝く

先生を偲ぶ

本田正俊

4月3日、先生はご逝去になった。数年前からご病気で療養に努めておられたが、このように早く先生を失うことは思わざることであった。先生は偉大な教育者であり、また政治的手腕にも秀でていた方であった。国のためにも惜しいことであり、我が大泉高校にとっては悔んでも悔みきれない気がする。もっとご存命で色々ご助言を賜りたかったのである。

謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

先生が第2代校長として本校に赴任されたのは昭和21年4月であった。終戦を迎えたばかりで、国民は皆戦争に疲れ果て、家を失い食糧に窮して途方に暮れていた時代である。

学校教育もこれから一体どのようになるのか皆目分らない。進駐軍の顔色を伺いながら時の推移を待つ格好であった。

校庭は防空壕と轟で爆弾などが埋っていたのだから始末するにも容易なことではなかった。

両角先生は40歳になられたばかりで、後年は恰幅のよかった先生も細く若い校長であった。

学校には家のない幾人かの先生が浮浪者のような恰好で住みついていった。1人のA先生が、校長がさつま芋でも喰って元氣を出しなと云ってお金を呉れた。この校長話せるわいといって喜んでいたので記憶する。校長はこのような人達に先ず食と住を与える仕事があったように思う。いや、先生は本当に親身になって、よくお世話下さったのである。私もその恩恵を受けた1人だが、今でも学校の近くで安い家賃で通勤の苦勞を全然知らない。有難いことである。大泉を絶対に去れない理由の1つである。

この年の11月には日本国新憲法が公布され、22年には新学制が実施されることになる。教育の目標も明確化されて、学校も軌道に乗る。

大泉の民主教育の生みの親は両角

先生である。先生は新しい教育のため率先して実験校を引き受け、英語、数学、保体、音楽などの指定校となった。男女共学のモデル校にもなったが、その前年先生は1人の女生徒を連れて来て引き受けてくれないかどうかと云われる。冗談でしようと思つたのだが、校長が懸命なので、私は新教育のため校長は気が狂ったのではないかと思つた。該当学年の卒業生の諸君、怒らないで欲しい、腕白者揃いの君達の中に紅一点とは物騒で逆も担任は責任をもつ自信がなかった。結局、2人の仲間を誘い3人の女性を入学させたのであった。この試みは先生の明賢な貴婦人となり活躍している。先生はこれで自信を得て次の年、男女共学のモデル校を引き受けたと云っておられた。

施設の悪いのは大泉の宿命であった。急激な生徒数の増加で増改築の行われなかった年はない。先生は東京都視学官をしておられたので、役所に顔が広く、またすぐれた手腕で尽力されて、なんら他学に支障なく現在に至ったのである。体育館の建設には特に努力され、ご自分の家まで抵当物件に提供されて、学校債を募集して完成されたものである。今では古くなったけれど、東京一の体育館だと思つたものであった。

また、先生は全校から募集して、校友の歌を決め、校歌を制定された。軍歌だけの当時、平和を象徴した歌詞とそのメロデーで、大泉伝統の師弟の和を生み出されたようである。

俗なことも書きましょう。先生は酒がお好きであった。先生のお宅にもよくお邪魔してご馳走になった。先生と呑むと全く愉快になった。職員会議などで、のむことでもあると、先生は帰りに待っていて、ちょっと来いと云われる。一杯やれ、果ては俺の云うことを聞けとくる。こうなると愉快になって校長の云うことを聞いてしまう。入試の頃になると、進学を非常に気にされていた。合格者を1人殖すごとに先生1本ですよと云つてよくおねだりした。発表の日には日曜、祭日でも先生は登校

されて、茶わん酒で氣勢を上げたものだ。病気になる前から、先生ともう一度呑みたいと申し上げたことがある。1杯ぐらいなら呑めるよと云われて乾された。このご様子で、先生の全快は間違いないと思つたが帰らぬことになってしまった。

先生の逸話は数多いのだけれど、私は能がなく、面白く文章に表現できない。残念である。

今も、先生の笑った温顔が浮いて来て仕様がな。靈よ、安らかに眠り給えと祈つて拙い私の文を終ります。

先生の声

橋本精一

前田さんのお話を聞いて驚いた。先生が亡くなる前日、先生の夢を見られたそう。久しぶりに学校に来られたので、お上りくださいというので、敷居が高くなって上れなくなったと言われたそう。前田さんならでは、のお話である。

41年は大泉の25周年に当たった。すっかりお元氣になった先生を校台のお宅におたずねして、1時間半も大泉の思い出を話していただいた。聞き手は小島先生である。この時の録音は貴重なものとなった。今久しぶりにテープを聞くと、なつかしい声が肉声のようである。思い出を話される先生の声は、いかにも楽しそうである。

私は終戦後2年間、都の教育局の視学係にいたが、局に入るとすぐ、あれが元視学、今大泉の両角さんと教えられた。先生は時には無理も言っておられたよう。帰られたあと、両角さんだから仕方がねえ、と言っているのを聞いた。先生は局で顔がきいた。それが多難なあの時期に、何か大泉のためになったことだろう。

初めて個人的にお話したのは電車の中であった。おたがいに家が校台であることがわかった。問われるままにそれまで中学5つ、女学校1つに勤めたこと、役所はやはり自分の性に合わないことなどをお話した。それから数日後、家に帰ると先生が私の帰りを待っておられた。私は恐

縮した。大泉へ来いと言われた時には、上司の許しを得る前に大泉へ行くときめてしまった。その時、畑を40坪貸すと言われたことも絶対的で、前任校からもどれという話にも、役所で考えた転出にも、大泉行が優先してしまった。23年春、まだ食糧難の時代であったので有難かった。

テープは私の知らない不発爆弾や校友の歌の思い出を話してください。先生は戦後の青年の意気をもりたてるのには歌がよいと考えられ、校友の歌を制定された。応募歌詞の中で伊藤先生のが一番よかった。中には両角先生の理想が歌われている。新学制実施の時の苦心談。先生方を集められた時のお話は長い。遠い所までもよく出かけられた。高校教育を通して練馬区に力を尽すと言われ、区長に交渉して都営住宅に職員住宅を確保したこと、パーマ賞受賞のこと。共学開始のことは、森山先生と私が担任を命ぜられたので、私の思い出も多い。

不十分な施設についてのご苦心も多かった。たった1台のポロピアノの鍵は1つ音が出なく、修理不可能であったのを覚えている。それで新しいピアノが入った時の先生の喜びは非常なものであった。その喜びを「ピアノ来たよ」という詩に書いて私に示され、新聞にのせたいとおっしゃった。この詩がのっている新聞が今見当たらないのが残念である。すばらしい詩とは言えないが、校長の純情というものがあふれていた。

施設の面での大事業は体育館建設であった。PTAの熱意に動かされ、地区別に開かれた会合に全部出席された。地区別の会合には卒業生も参加した。卒業生はまだ若いので、中にはアルバイトで得た金を送って来た人もあって先生をいたく感動させた。しかしこの事業で先生の血圧はあがってしまった。体育館は本当に当時の人の浄財によってできたということをお忘れしないでいただきたいとおっしゃる。

体育館の位置がきまった時、野球部からガラスを割るおそれがあるから、少しひっこめてもらいたいという申し入れがあった。その時先生はガラスを割るような大飛球結構、割ってもいいから大きいのを打てと言われた。先生はこういう風に、人を励ます法をよく身につけておられた。ポプラの思い出も言っておきたいとおっしゃる。北海道へ行かれた時、北大のポプラを見て大いに心を動かされ、卒業生の記念植樹の時

に、今の木が植えられた。ポプラにきまったのには小島先生の進言も力があつた。しばらくおられた茨城の水郷のポプラが忘れられなかったもので、両角先生のご希望と一致したわけだ。ポプラがぐんぐん成長した時、台風が来て有名な大泉湖が出現した。岸辺のポプラはまたすばらしかった。小島先生が満足されたことはいうまでもなかった。

先生は校長会から推薦されてアメリカへ視察に行かれた。——アメリカは広い。参考になることが多かった。しかしアメリカのまねはいけな。日本には日本の道があるべきだ。また広いアメリカでもっと広い中国を想った。中国にも関心を持たなければいけない。

帰国後、校長会にお礼奉公しなければならなかった。向うもまたさせようと思つていたらしい。それで国会へ陳情にも行った。そして校長会に深入りしてしまつた。アメリカ行などは夢にも思わなかったことだ。思いがけないことが起るのが人生かもしれない。——さりげなく続くお話であるが、この辺は何とも言えない気持ちのするところである。

最後に、今後の大泉に期待する、ということをお願いした。——どの高校に対してとは言わぬ。健康と思いやある豊かな心と向学心をすべての青年に望みたい。都心の学校へ行くと樹木は生きるのに苦闘している。空気が悪いから人間も生きるのに苦しんでいる。武蔵野も次第に浸蝕されて行くが、大泉はめぐるまれている。おおらかな豊かな心の人となってもらいたい。大学進学も大事だが、近視眼的にならず、遠い将来に目をつけ、絶えず自己を育ててもらいたい。

先生は第2代の校長である。——初代校長の創業のご苦心は大変であったが、敗戦という線が引かれてからは私の約10年間は初代的な意味がある。

久しぶりにこのテープを聞くと、これを話して下さった時のお元氣な先生が目に見え。テープのお話は終わった。同時にコピーが取れた。このコピーは、先生のご活躍に大きな内助の功のあった奥様にさし上げようと思う。

一編集部より一編集部では両角英運第2代校長を哀悼する為、先生の思い出を本田、橋本両先生に書いて頂いた。本田先生は数学の、橋本先生は国語の教鞭を大泉でとっておられた。

— 放 談 会 —

母の日に母校を語る

両角先生を悼む

本田 二代目校長両角先生が亡くなられた事をお伝えします。先生は十年間本校におられ大泉の民主教育の創始者でした。今までの大泉は、代々の校長先生が御健在なのを誇りにしておったのに残念です。

前田 私は4月1日に両角先生が大泉にいらした夢を見ました。「お上がりなさい。」と私が言う、「敷居が高く上がれない。」とおっしゃられた夢でした。その翌日の4時頃お亡くなりになりました。私が飛んで伺うと、奥様が、「主人は大泉に一番愛着がありました。先生方や生徒の心配をして最期まで、4月1日発行の職員移転の新聞を待っていました。」とおっしゃるのです。生前先生が、何かにつけ「泥棒はしかたないが火事だけは出さないでくれ。生徒が楽しくやる学園だけは燃さないでくれ。」とおっしゃっていられたのが、胸にしみ思ひ出されます。

橋本 両角先生の大きな業績と言えば、まず良い先生を集めたということでしょう。

本田 そうですね。「良い先生を集めることが教育の第一歩だ。」とおっしゃられて。



橋本 当時は先生を集めるのに住居の世話までしていた時代です。今の1年7組の辺に先生方が住みついていました。公には許されていません

でしたが、両角先生は教育者でもあり、また政治家でもあって。

本田 なんせ時代も今とは違っていましたから。

橋本 両角先生は本校に就任なさる前、教育局（今の教育庁）におられたので無理が利いたのですが、初代校長は戦時中が大変でしたが、両角さんも戦後の大泉を背負って大変だったでしょう。

本田 初代校長はやはり本校の建設ですね。建設の途中に戦争があって完成できず、その後の両角さんは、何回も創っては壊し、創っては壊して、どんなにか御骨折りだったでしょう。体育館は先生の残した一番大きな建築でしょう。これは当時、東京都でも御自慢の体育館でした。先生の家などを抵当に学債などの借金で創られました。

前田 30年の10月に完成しました。両角先生の出られたのは同年の9月です。

杉山 当時僕は小学校6年で、「すごいものができた。」というので、6年生全員で音楽を聴きに来た記憶があります。新しくとても立派でしたよ。

橋本 僕は畑を40坪ほど貸してくれるというので、ここに来たのですよ。当時、魅力ですね。（一同笑う）

本田 初代校長が生物の先生で、なかなか畑作りが上手でした。警報で生徒を帰した後、職員全員でやったのですよ。

橋本 今のバスケットコートの方まで畑で、帰りが遅くなった時、生徒と一緒にさつまいもを掘ってきてバケツで煮て食べたものです。

荒木 バケツで！

本田 ひもじい思いは若い君たちには想像もつかないでしょう。

西尾 本田先生がこちらにいらしたのは、いつ頃でしょうか。

本田 ええと、昭和19年のことです。当時菊谷先生が中学3年で坂間先生が2年。あれから26年たったわけですね。

荒木 菊谷先生の期の中学期で、卒業が2年間にわたっているのは何故でしょうか。

本田 当時支那事変があって、工場に働きに行く者や予科練に入る者もあって、4年で卒業してもよいということを経済省がいつてきたものだから、4年・5年で卒業した人がいるわけ。その後、22年に学制の改革があって、6・3制になった。

大場 昔の旧制中学と今の高校の学生気質はどのように違いますか。

本田 それはね、戦争を境にしてまるで違う。以前はね、生徒は号令通りに動いていた。例えば本校は、砲のかけ方は右肩から左へとか、駅から本校までの通学は一列にきちんと並んでくるとか。いわゆる礼儀ですね。先生にしたって昔の先生は、生徒を叱れ、殴れと言われていましたよ。生徒を殴れないようでは教師の資格がないとか。

大場 へえっ。今と大分違いますね。

本田 しかし、一番嬉しかったのは私が初めて校門をくぐった時、生徒が敬礼してくれたことでしょう。これは先生のみでなく、学校に来た人には誰にでもね。

大場 学習意欲の点では？

本田 そうね、昔はよく勉強してたみたい。

大場 昔はって？

本田 もちろん今もよくしてまうけど。（笑い）

前田 わたしは直接教育には携わりませんが、間接的に見て、どうも近頃の生徒さんは、昔に比べて親しみがないように感じられます。

本田 それはね、学生にもよると思うけど、昔は5年で長かったし、人数も少なかった。今はたった。3年で生徒数も多い。先生方も50人位いるし、生徒とわれわれの対話がうまくいかなかったんですよ。それに戦争を経験した者はいろいろ思い出もあるし、危機を共にした結びつきもあるんですよ。今の生徒は先生の家遊びに行きませんよね。うちに来るのは、大抵戦時中の者ばかりだね。

橋本 そう、ひとの迷惑も考えずね。多数集まって私に用があるのかと思うとそうではなく、単に会場代りにしているのです。（一同笑う）でも愉快になってきますね。生徒に対して先生の数を増せば同じだと思うと、これが全く違う。

本田 9クラスもあると生徒間の交流が少なくなるでしょう。私達教師間でもなかなか交流ができにくくなるし。そういうところに現代教育の問題点がある。しかし学校だけはなごやかであって欲しいですね。

私的交際を禁ず！

荒木 本校が共学になったのは？

本田 24年でしたね。

橋本 そうですね。



本田 共学についてはちょっとした思い出があります。23年のことですが、当時の校長の両角先生が私を呼んで、「どうだい、ひとり女の子を引き取ってくれないかね。」とおっしゃられたんですよ。なんせ、その頃は女子はひとりもいなかったから、校長は本気かしら、そんなことが有りうるのかと疑ったものですよ。土肥暢子さんという人でしたが、是非大泉に編入したいからと言ってきたそうです。校長は「いいじゃないか、試しにやってみないか。共学というものはやり出したんだから。」そこで、ひとりではかわいそうだから2・3人集めて来ますと言ったものの、そうそう、あの高校3期には何と言っても、やんちゃ坊主が多かったのどうなることやら想像だに付かない有様でしたよ。しかし、その3人は極めてりっぱに、全てを修めてね。ちょうど3期の同窓会にこの間出席して来たのだけど、その中の一人が来ててね。もうあっぱれな貫録だね。3人ともそれぞれたいへん良い家庭を築いていてくれるようです。あの教育は成功したということですね。両角先生に、先見の明があったということですよ。このへんで、橋本先生に。先生は女子教育の専門家だから。

橋本 その翌年、24年に、都の男女共学モデル学校に指定されたのですよ。その時、女子は37名でした。始めたのは私と現在都立大助教授の森山先生。まあ、私が担当するようになったのは、中学が二つと女学校の経験があるからということでしたが、混ざったのはまた別ですね。（一同笑う）彼女らは自分たちが最初だと思っていたのに上にもう3人いたのでガッカリしたのか、なかなか両者うちとけなくなつてね。

本田 西校舎でしたね。

橋本 ええ、西校舎の下の間です。

湖面をコウモリのように

本田 清水校長の時の生徒は、誰かいますか。その頃の思い出などを。



市川 榛名湖は私達の時からなんです。私は夏冬両方行きました。土曜日にスケートに行った時は、着いたのが、満月の夜だったんです。とても印象的でした。

本田 電灯もない時で、確かランプだったね。汽車で行ったね。

市川 今はどのようになりましたか

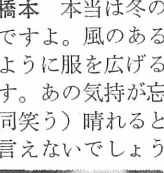
本田 もうやってないんですよ。何かと便利になったんだが、行かないんですよ。

橋本 観光地化しちゃったのですか

西尾 いつなくなつたんですか。僕は行った覚えがあります。

本田 まだあるんだが、学校行事としては無理になったんです。土曜の午後に出掛るので、着くのは夜になるでしょう。日曜の午前にはしかすべれないので、金かけてわざわざ行くには勿体ないと言うんでね。夏は高原学校をやってますが。

橋本 本当は冬のスケートが良いんですよ。風のある時に、コウモリのように服を広げると自然にすべります。あの気持ちが忘れ難くてね。（一同笑う）晴れると、赤城山が何とも言えないでしょう。



山田 それに風呂が壊れていてね。

本田 あの風呂は有名でしたよ。朝から焚かないと沸かないんでね。（一同笑う）清水校長は円型校舎も、御

自慢でしたね。

橋本 参観者が多くてね。さっそく図書館の研究会場になりましたよ。

女子はひとりもいなかったから、他のクラスの者が窓（その頃一段と高くなっていて）から覗いてしょうがないんですよ。（一同笑う）よっぽど珍しかったんでしょうね。

本田 確か2クラスで、他のクラスがむくれたんでしたね。

橋本 それで、男女は「水と油」のようで中々うちとけないんですよ。しかし、ああなってくると女性の方が上手。「お早よう」と女子が声をかけて男の方は「ウーム」という具合に。当時、両角先生が「安ずるよりは生むが易し」とおっしゃったが、本当にその通りで、すぐになごやかになりました。

本田 結局、おとなたちの心配よりも生徒はうまく行なったということです。

橋本 そういえば妙な規則がその頃できた、『学校内での男女の交際は許すが、学外の私的交際は、当分これを禁ず』今考えると変ですが、あの頃は何分見当もつかなかったのですからね。

荒木 それで父兄の批判はどうだったのですか。

本田 そうね、やはり世間的にはずい分危惧されたんでしょね。喜んでこの共学スクールに入れたのは、進歩的な家庭だったのでしょうね。

橋本 いわゆる男性の女性化、女性の男性化という問題は、この頃からおこりました。ことば使いその他で、学年会などでもよく質問されました。新しい時代で、何が女らしさということか？ということから考えなくてはならないではありませんか、などと答えたこともありまして。

とにかく当時としては珍しかった。新宿の文化服装学院の次でしかね。丸いのは困る、と建築事務所に言ったんです。するといきなりバンドをはずして、『こうして丸くすれば広く利用できる』と言われてね。金がない時なので、仕方なくあきらめましたよ。

本田 これ微分だな。周が一定で面積を最大にする。（一同笑う）

荒木 プールはいつ作るのですか。心待ちにしていたんですが。

本田 それは今の校長が盛んに意欲を燃している。近いうちに出来ると思いますよ。今年から管理塔を作り始めて、それが終わってからでしょう。プールの工事にかかるのは。

橋本 南校舎をこわさないで出来な

いからね。

荒木 大泉公園をつぶすのはおしいですからね。

本田 本当は増改築に金がかかり、プールにまでまわらないのが実態です。池部君のいた頃は校舎が二つしかなかったですね。



池部 いわゆるL校舎だけでした。

荒木 高校に入る前、西校舎をみて随分ボロだと思いました。茶畑があった時は、まだ校舎とマッチして

よかったが、コンクリート塀になってから一層感じが悪くなった。（一同笑う）本校の校庭は広いですけど土地は提供されたのですか。

本田 大泉公園は寄付してもらったんですがね。学校で土地を買って同窓会館を建てる気運があったが、都では公立校が私有財産を持つことを好まなかった。その頃から都立では一、二番に広いですね。運動場はよ

っていたんですね。あの頃は本当にひどかった。戦時中だったしね。

池部 中庭と運動場が続いていた。まわりにずっと防空壕を掘ったんですよ。あの時は苦労しました。お陰でサボレましたが。（一同笑う）

荒木 いつか台風の後、水たまりができて鴨がいたことがあるんですよ

前田 台風27号の時に、いわゆる大泉湖ができました。一週間ぐらい水がひかなかった。（一同笑う）

市川 私達のころもそうでしたよ。

前田 月のでてる夜に湖面に反射してキラキラと、美しかったですね。

本田 そもそも測量の手違いで道路より低くなったのですよ。それで余計にたまり易くなったんですよ。

母のもとに集まれ

前田 何か事ある度に集まる大泉生の数が減ってるのは、本当に寂しいと思います。私が何故こういう事をいうかと言いますと、もう20年間も学校にいますと、学校が彼のように思えて。正門付近の木々を見ると、室



岡校生の『木を育てるように教育したい』という言葉が思いだされます。事ある時には和気あいあいとした気持ちを卒業生に持ってもらいた

いですね。学校のある限り皆さん大泉生として、大泉を母校として愛して欲しい。同窓会をやっても百人ちょっとですものね。「在校生はいないし友達も来てるかどうかかわからないし。」と言って、次から来なくなってしまう。運動部の集まりでは楽しそうにやっているのに。グループの連関をスムーズにすれば、もっと連帯感がわくと思います。憩いの場として年に一度は集まって欲しいですね。先生方も是非いらして欲しいですね。同窓会には。

本田 そうですね。今までは少なすぎました。今年は担任は全員出てもらいましょう。年がたつにつれ、昔の友人や学校が懐かしくなるんだがね。若い時には感じないのですね。



杉山 前田さんが言われた事は一番大事だと思いますね。大泉が伝統だのと言っても、それを担うのは僕達ですからね。ずっと続く結びつきと

いうのは、どうなんでしょう。人数にも関係するのでしょうか。

前田 いつでしか入試の時に、時から来ていた人がいました。群制度の前ですが。どうしても大泉に入らんと張りきっていたのです。そういう意気込みの人が多かったんですよ。昔は。ところが去年の入試の時に、「大泉に入ってください。」と言ったら、どうせ「大泉に来れるかどうかかわからないから。」と言うのです。だからお茶を出す張り合いがなくなってしまうました。（一同笑う）今年でも一時間前に来た人は稀れで、時間すれすれという人が多いのです。こんなにも変わったのかと思いました。

本田 そういうのを乗り越えて行つてほしいのですがね。

西尾 今年の総会には、そういう意味でも、大勢集まって欲しいと思いますね。話はまだまだ尽きそうにもありませんが、これで終りたいと思います。では皆さん、お忙しいところをありがとうございました。

“いずみ会”を思う

幹事としての思い出

高 3 期 中 山 茂 雄



はじめに、私が幹事をおひきうけたのは、昭和28年頃だったと思います。級友の I と T にくどかれ何も判らないまま、総会の通知の宛名を書いたり、機関紙の編集をお手伝いしたのが、はじめての仕事だったと記憶しています。それから現在にいたるまで、実に17年間、自分でも驚ろくほどの年数を、いずみ会々員であることよりも幹事として“いずみ会”に、継続的に結びついてきました。

去る4月、多くの関係者の悲願もむなく故人となられた二代校長両角先生から定年退職された所先生まで五代にわたって校長が替り、中1の名倉氏から中2の池辺氏まで、これも五代の会長につかえることになってしまったのです。

この間“いずみ会幹事”としての私のアルバムには、ほとんどが、私が欠席のまま選任されてしまった事務局長の、昭和34年頃から、途中1年だけ会計監査をはさんで、昭和44年にその職を辞任するまでの約10年間のことが集約されています。そして、アルバムのどの頁にも、共通して幹事会の組織のことおよびその円滑な運営に関すること、機関紙の発行や総会の開催など、会の事業目的を遂行するための財政の確立との苦闘の記録が記されています。

すこしふえんしますと、一つには、幹事会や事務局構成メンバーのチームワークをととのえ、本会の目標達成のためにかして円滑な会や局の運営を図るかということであり、もう一つは、乏しい会の財政の中で、会員の皆さんのために、いかにしてその投資効果をマクシマムとするかの努力の連続だと思えます。沢山の建設的な会員のご意見をいただきながら、又、実施したくても単に財政上の理由で実現することができない事務局のアイデアを目前に、苦悩したものです。

私は、この小さなアルバムの頁をめくりながら、事務局のことや会の財政について、思いつくままを述べてみたいと思います。

いずみ会の問題点

高 20 期 西 尾 淑 人

昨今、いずみ会運営上の原動力である若い期の幹事から、いずみ会の本質に迫る議論が展開されたりして、いずみ会も御多分にれずその姿勢というものが、再評価されつつある。そこで、来年は創立30周年にあたり数年後には会員数一万人を突破するのでもあり、いずみ会の問題点を浮き彫りにしてみたい。

いずみ会の構成は中学高校の卒業生からなる正会員と教職員の特例会員とから成り、各クラス2名内外の幹事を選出し、幹事が自主的に活動するのを旨とし、いずみ会の意志決定機関として幹事会が年5,6回開かれている。毎年春になると、その年の3月に卒業した新幹事を迎えるのだけれど、幹事会が2回3回と続くにつれて最初十数名いたのが4,5名というのが毎年常識になっている。又、自分の意志に反して幹事になったかどうかは知らないが、卒業後たび重なる連絡にもかかわらず一回も幹事会に出席しなかったり。もらい物(いずみ会名簿等)がある時だけやって来て、その席上で「私は興味がなく本当は来たくなかったのだけれど、

二、幹事会の再編成と財政

本会の会員は、年々卒業生を迎えて増加していきます。こうした会の運営と発展を図るため、発展を図るために、各期から幹事が選出され幹事会のメンバーを構成し、総会(昭和43年度まで年1回母校講堂で行なわれていた)で、すべて幹事会で執行していく事項を議決して行きました。ところが、幹事は年々増えても、幹事会に出席するのは、いつも30名前後でした。世帯の小さい間はそれでも、家庭的な雰囲気の中で結構円満な運営ができましたが、やがて定足数に充たなくなるおそれがでてきたのです。そこで、幹事会は体質改善をせまられたのです。現在ある事務局というのは、この頃、鰐川前会長が、実態にあわせて設けた制度です。つまり、議決機関として幹事総会を、執行機関として事務局を中心とする常任幹事会を分立させ、いずみ会総会や、幹事会における定足数の問題を克服するとともに、両機関が相互に牽制しつつ円滑な会の運営を図ることができるようにしたのです。私は、会の体質改善の帰結としてのこの制度の長短をのべるよりも、実態に即したものであったことを強調いたします。そしてこれから環境の中で、同窓会を存続させ、発展を図るためには、同窓会に関心をもつと同時に、同窓会の仕事ができる人、やってくれる人をお願いするよりほかはないと思います。同窓会の発展は、理屈ぬきで、縁の下の力を発揮していただける人達による運営なくしては望めないと思うのです。

つぎに財政についてですが、過去の細かいデータによる説明は省略して概説いたします。

会員が少なかった頃には、消極的ながら、経常事業は円滑に運営されておりました。ところが会員数が増加するにつれて、事務量の増大と、公共料金等の値上げなど諸般の事情によって、逐次財政状況はひっ迫し、昭和42年頃には、パンク寸前になってしまいました。幸いにして、学校、PTAのご協力により、入会金の値上げが認められ、現在、終身会費2千円になりました。これで年度間の財政収入は、90万円位になる

と思います。

こんなエピソードがあります。それは、前回の名簿発行の時でした。たまたま創立25周年記念事業(学校の希望16でミリ映写機寄贈)と重なりました。当時入会金は、年額18万程度で、名簿発行は積立金をくずすとしても、25周年事業の方はどうにもならない状態です。この苦しい財政状況をのりこえて双方とも、やり遂げるために、真夏の炎天下を、鰐川会長、菊谷先生(中2卒、母校在職)と私の3人で仕事も忘れて資金獲得のため、篤志家の同僚や先輩の事務所を訪ねたものです。その時、東京ペイントの長谷川先輩の応接室でいただいたオレンジカルピスののどを通る味は、今でも忘れることはできません。

さて、会の収入が、現在の経済情勢の下でも年々90万弱ということになれば、当然、事業計画に先行性をもたせることは可能だと思います。まず第一に、入会金による収入だけという消極的なものから、余剰金を基金とする積極財政への転換を図るべきではないでしょうか。具体的な方法は、常任幹事会等でご検討されればよいでしょう。

つぎに、財政の機能を、会のため効率的に運用するためには、事業別的小委員会(小人数の方がよい)を作り、事業別予算の配分と、責任執行の体制を確立することが望ましいと考えます。

三、むすび 以上思いつくままをのべてきましたが、幹事会の円滑な運営や財政運用の苦しみの連続であったとはいえ、私の事務局長時代を思うとき、それらの仕事を通じて、私の人生に大きなプラスであったことを申し上げます。

第一に、私の生活環境の中では、絶対に接することのできない多くの立派な諸先輩を身近におくことができました。つぎに、同僚の暖い助言や勧告によって、同窓会でなくては味わえない友情を培うことができました。そして、可愛い後輩達が、不出来な私を慕ってくれ、又、苦中であって惜まない協力をしてくれました。局長引退事業となった名簿発行などは、これら多くの皆様の協力のたまものです。内容は不充分だと思いますが、これをたたき台としていただければ幸いです。

さい後に、これからも、微力ながら、“いずみ会”の発展のために、蔭ながら力ぞえをしていきたいと思えます。同窓会——それを“心の灯”と思考するのは、私だけなのでしょう。

題になるようで人によっては一定しないが、若い者に概して魅力なしとする者が多いようだ。いや、魅力なしというより「関心がない。」の一言で片づけられる者が多いし、「正会員としてちょっと無責任ではないか？」と注意すると、「自分で好きこのんで入った覚えはない。」と居直る者もいるようだ。(規約で会員は卒業と同時に自動的に加入)

毎年恒例のいずみ会の活動の柱は2つでそれは「総会」と「いずみ会会報」で、これらの下働きは若い期が受け持っていて魅力喪失の一因を成しているようだ。ところで一般に会報の発送をもって総会通知に変えているが、毎年宛名不明で返ってくる封筒の多さに驚かさぜられる。住所変更の葉書一通いずみ会宛に出すだけで無駄を省くことができ会員としての恩恵を受けることができるのに、通知する人は少なくこういうシステムを知らなくて葉書を出せないという人も多いし、日常生活の煩わしさに出さない人も多いようだ。

いずみ会がこの2本立から脱し切れない所にも魅力なさの理由があるようだ。古いことはわからないが、ここ2年間は会報発行・総会が終れば後は来年の春まで休みといったあんばいであった。これは勿論財政的余裕がなかったことが大である

が、現在の終身会費制(卒業した時点においてだけ会費を徴収)ではいずれ会員数の増加に対処できなくなる日が来るだろう。これは早急に何らかの積極的な打開策が必要であろう。財政的な問題を除外した段階においては夢は広がる。

例年浮び上っては消えていくが、運動部・文化部・小委員会のOB会の組織化、中1期から高22期に至る合計25期に及ぶ期の同期会の統合と、同窓会館の建設等夢はつきない。これらはいずみ会の幹事だけが頑張っても達成出来るものではなく会員各々の意識向上以外にないように思えるのだが…。

いずみ会規約 第1章 総則 2条 この会は会員相互の親睦・援助を図るとともに、母校の発展に寄与することを目的とする。

総 会 問 題

既成の事物に対する既成の価値判断から離れて、原点に帰って考えるという、現存の風潮か否かは明確ではないが、現在、いずみ会はその本質にまで帰ってその在り方が問われている。

この問題はかなり以前から燃っていたのだが、最近いずみ会で表面化して来た。すなわち、昨年5月8日の「同窓会総会に関する幹事」総会の席上、高18期を中心とする一部の人たちから、総会を何時、どこで、いかにするかを問題にする以前に同窓会、すなわち、いずみ会の、とりわけ総会の在り方を考えようという問題提起がなされた。しかし、この時は執行部から総会に予定している6月29日まで時間的余裕の無いことが報告され、この問題に何ら答えることなく、終わってしまった。そして、6月29日は、いわゆる普通の形式で8,000余名の内100余名の結果をもって総会はなされたのだった。

7月2日に反省会が行われた際、再度この問題が提起されたのだが、結局単に、総会における具体的事例の総括にとどまった。(20,21期の参加者が以外に少なかった、等々)

12月3日になって執行部の招集により、19~21期を中心とする若い期と執行部との間で、これらに関する討論が行なわれた。

「8,000名のうちたった100名程集まって飲んだり食べたりしたところで、どれだけの意味があるのか。同窓会は親睦のための団体というが、結局、いわゆる上下の連帯など幻想にすぎないのではないか？」

幹事以外にも、これと同様の考えの人が多と思われる。つまり「同窓会があるうと、なかるうと自分には関係ない。暇な連中が暇に任せてやっているんだろ？」等の声が非常に多い。「大体、偶然にも同じ大衆を出ただけで、しかも年度が異なるのに各期の交流等といっても無理である。それに、それがあったとしても、大して重要ではない。同期ならまだ話は別だが。」「それはそうだ。」例えば、21期では同窓会にはたった18名しか参加しないのに、同期会には110名を越える参加があったのが端的に示していると思う。」「だから、ここで、いかに総会を盛り上げて行くかを考えねばならないと思うのだが」「いいえ、それはちがうと思います。総会が包含する限界性を示してしまっている以上、そんなのでは問題解決にはならないでしょ。」「なぜ?」「結局、幹事は、幹事総会、同窓会の総会準備、総会、反省会、このプロセスを毎年繰返しているだけではないか。それ以外に何をすること自体、価値があるのが疑問なのに、上から、よろしく願います、と言われても消極的ならざるをえない。おまけに一般の会員にそっぽを向かれています同窓会なんて……。全く時間の消耗。」「これはほとんどの幹事のいつわらぬところ。」「一体同窓会って何ですか?」「名簿さえ作っていれば

いいんじゃないの?総会参加者は全体の1%強。会報を読んでいる人もどれだけいるのかしら。」「名簿をもっと完全なものにした方がよっぽどいい。今後どうすればよいと思いますか。」「総会は止めて、各同期会の集合体として同窓会を位置づければよいと思います。同期の方がずっと楽しくやれるし……。」「総会の経費を各期に分配してくれたら、もっと盛り上がるね。」「でも同期会もマンネリ化しているネ!」「今までのいずみ会と訣別して、幻想親睦団体としての同窓会を一切否定し、それをより高度な次元に止揚して行かなければならないと思います!」「やたら、スゴいね。」「でもそれは結局、先程言ったように、同期会集合体に帰着するのではないのでしょうか?」「それはまだ、考えてみないと駄目だよ。」「来年の総会は、今までのようにする、という前提を無くして、無期延期してこの問題を煮詰めようではありませんか。」「執行部としても、この問題は重要だと思いたすので、月末に今年の反省を兼ねてこのことをもっと考えていきたい、と思っています。」「……………」

この日は時間切れとなってしまったが以来、この問題についての会はもたれていない。今年になって最初の幹事総会が4月16日に開かれたが、会則により総会をするということで、この問題は再度立ち消えとなってしまいそうである。執行部から提起された、この問題を考える「小委員会」も未だ発足していない。

一体、若い期を中心としたこれらの愚痴っぽい造反が有理か無理かは各々の判断によるが、今年の総会にでも参加して、これら同窓会での問題をどうするかを、そして「いずみ会とは?」同窓会とはを原点に立ち戻って再考するのも興あることでは……………。高21期 守本 純

昨年度総会風景

昨年のいずみ会総会は6月29日、池袋の豊島区民センターに於いて盛大に催された。

参加者は150名余り、全会員の8000名と比べると多少、寂しい気もするが、会そのものとしては、なかなか、和気あいあいと、成功裏に行なわれた。

まず、新会長池辺洋さんの挨拶、前役員の方々への感謝、そして、新役員の副会長佐々木健雄氏(高4)同じく市川泉氏(高13)、事務局長遠藤寛氏(高7)らの紹介があり、そのあと、この年、定年退職された第6代校長の所弘先生(先生はこの春、肺炎のため重病が伝えられていたが、元気なお姿を見せられた。)の挨拶があり、そして、母校最古参の本田正俊先生による乾杯の音頭で始められた。

当初、立食形式で行なう予定であったが、早くから来て待っていた方々や年寄り?の方々もおられたのでいつのまにか同期同志でかたまってしまった。

しばらくの間、テーブルのビール、ジュース、サンドウィッチ、サラダなどに手をのぼしながら、思ひ出話や、同期生、先生方の悪口などに花を咲かせていた。

そして最後にくじ引きの時間が来た。会場へ入る際、会費と引換えにくじ引き券が全員に手渡された。空くじなしのスバラシイ景品が揃っていたこの景品の多くは先輩たちからの差入れがほとんどで、化粧セット、豊島園入場券、ポスター、ネクタイ、麻雀のパイ、ワイン、風鈴、蚊とり線香たてなど色とりどり、抽選のたびに歓声が上っていた。入口では住居変更等で新名簿を受取っていない人のために販売が行なわれたり、時間切れまで盛会であった。閉会後は各期がまとまって、小同期会と分化していった。 K&M

初夏の母校を訪れて

—母校近況報告—

新緑の若葉のはく息一久しぶりに母校を訪ずれてみて、そんな後輩たちの活気あふれる若さというものが感じられた。体育祭をあと二週間後にひかえたある日の放課後のことである。

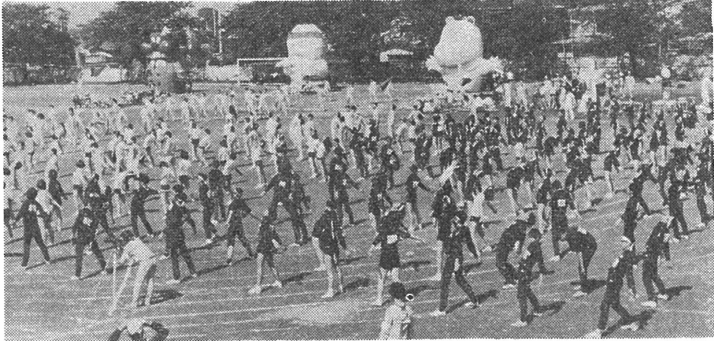
大きな声に引きずられながら中庭まで行くと、まず目に映ったのは、汗びっしょりの応援団諸君の練習風景であった。初夏の太陽が容赦なく照りつけている。

体育館の横ではマスコット作りが進んでいる。土台もでき上がり、竹を編む作業が始まっている、事故のあと、年々規模は縮小されてきているようではあるがやはり巨大なものである。私も二度ほどマスコット作りを経験したが、体育祭前日まで、全身ペンキだらけになりながらのひと月間はとてなつかしい思い出として残っている。

そこからグラウンドに目をやると、驚くことに、校庭は1メートル近くも土盛され、砂あらしも、豪雨のあ

とにできる大泉湖も一何年か前には渡り鳥が降りたといわれる一水はけが良くなったためにムカシ話となっていました。

確かに体育の授業、そしてクラブ活動のために前々から望まれていた



ことではあるが、一つ名物がなくなってしまった寂しさも感じられぬことはない。しかし夜間照明も定時制のためにとりつけられ都立高校随一のグラウンドは自慢できることになる。

さて、『現代の高校生は、とりわけ、大泉生は何を考えているのだろうか。』そこで、新聞小委員会の部屋をのぞいてみた。

その部室の壁には『大泉からポーズ左翼を締め出せ!』『民青狩りを始めよう!』などと書かれていた。ここでも民青と新左翼派との対立があるようである。98号・99号をもらって目を通して見た。

多くの紙面を占めていたのは卒業式問題であった。この春、多くの高校で卒業式問題が巻き起こったが、この大泉も例外ではなかった。執行委員会によって卒業式対策委員会の設置が提案され、一時、沈滞気味では

あったが11月中旬に卒業式討論が提起され、『高校教育を基調とした私達の高校生活を探求する』討論へと発展していった。

卒業式自体は国旗の掲揚と国歌の斉唱が除かれた程度で従来通り行なわれたようであるが、式のあと討論集会が開かれ、多くの問題を残していったようである。

70年安保改正を目前にひかえている現在、毎日街頭でのビラ配りや立て看板の乱立するキャンパスを見慣れている私には、体育祭の準備に余念の無い母校の姿が静かな、平和なものに思われた。しかし一見平和そうな大泉にも内在する問題はありそれに取り組む高校生達によって母校はどんどん変えられて行くことだろう。

でも、大泉がある限り私達の懐しい母校であることに変わりはない。応援団の太鼓や笛の音、音楽室から聞こえるブラスバンドの行進曲、そして、バレー部の泥だらけの練習風景などに、以前と少しも変わらない大泉を感じながら、新緑のトンネルをぬけ、校門を後にした。

(文責 高21期 岡 和雄)

菊谷先生入院!

去る5月6日に本校数学科菊谷義美先生(中二期)が、学校で急に具合が悪くなり早退した。翌7日朝自宅にて吐血しお茶の水の三楽病院に入院した。胃潰瘍の疑いで入院2カ月の予定、三楽病院 千代田区神田駿河台2-5(地下鉄・国電お茶の水駅近く)

教職員異動

佐田 強 教頭 6年→日野高校長
佐々木 望 社会 19年→退職
池田 洋一 英語 4年→第四商業高
新井 菊太郎 事務 21年→退職
沢田 芳郎 事務 7年→小石川高
遠山 とよ 役員 15年→退職

進学状況

千葉大11名、埼大10名、東大、東工大、東教大9各名、横国大8名、北大、学芸大、農工大7各名、一橋大4名、その他国立大30名、都立大、横浜市大各4名、その他公立大5名、早大100名、慶大40名、理科大28名、中大27名、立教大14名、上智大27名、青山大、成蹊大各11名、東女大、武蔵工大、明治大各10名、その他私立大98名、実践短大8名、青山短大、共立短大各6名、その他短大40名、津田SOB、YMCA(秘)各3名その他各種学校24名。

就職状況

商工中金、第一銀行各2名、アルス工芸、西武鉄道本社、大和証券、東京ガス、東京電気、東洋棉花、都建設局、豊島税務署、トヨタ自動車、日商岩井、日清運輸、日興銀行、日本ステンレス、文化放送、みすず書房、三菱商事、和光交易各1名。

計 報

19期 江藤正文	42. 8.30 事故死
〓 白井真樹子	42. 9. 7 病死
20期 荒井 博	43.11.21 病死
〓 田村恵子	44.11.10 事故死

編集部より一今年号より会員の計報をのせることにしました。集編の都合上19、20期の分しかのせられませんでした。したがって漏れた通知は古いのも次号にのせるようにいたします。いずみ会宛まで連絡をお願いします。

編 集 後 記

〇会報から足を洗ったつもりだったのに、気がついたら、また編集後記を書く破目になってしまった。こんなもの誰が読んでくれるものかと正直に言って、小生もいたく感じている。紙面を如何に埋めるかに追われてしまつて内容が乏しいと思つたりもする。しかし、小生は思う。これが決していい加減に作られたものではないことを。僅かに数名で精一杯やった、いわば青春の記念碑であるはずのものと。 Y

〇きまつたぜ、セニョール! 予備校へ通う身で、連日の午前帰り。持ち前の好いから幹事をひきうけたが、こうなると知つてたらなんじゃなかった。流石に親も観念したのか、夜中にコソドコロよく帰っても何も言わない。寝しなにラジオをかけたら、曰く、「きまつたぜセニョール!」 K.A

〇ひと月少々で、この莫大なる原稿を書き、集め、編集する作業は、始めての経験である私にとって、非常なる労働となつて自らに跳返つてきた、それが故に途中で省みる時間も無く、後記を書く時になって、いろいろ欠点などが表面化してきたが、もう時すでに遅しである。御不満なども多々ございましょうが、至らぬが為と、なにとぞ御容赦を。 K.O

〇卒業後2年余り。並みいる同期幹事18名がいつのまにか小生一人になり、その悲哀を味わいつつこさえたこの会報一冊には余りの個人負担に叫び、原稿の依頼に自己をへつらい全体の進捗の調節に気を配り、原稿集めで一苦勞し、構成で夜中の2時までかかり、どうにか校正までたどりついて一人前になったこの会報一冊是非御一読を! Y.N

音楽部 OB 会

音楽部のOB会は、会合そのものとしては、毎年5月の始めに大泉高校様客寮で、その年卒業した人を変え前年卒業者が幹事となって合宿するものがそれである。参加者は、30人程度で男女が半々になる位だ。何と言っても音楽部だから、ギター等の伴奏で歌を歌うのは勿論のこと、ゲームをしたり、湖畔を散策したり、おにぎりとかかん一杯のお茶を持って、山登りをしたりして過すのだが、最も多くの比重を持つのは、先輩後輩が問なく、様々の事を夜更けまで、時には夜を徹して、話し合うことである。寮の雰囲気のためか討論したり、口角泡を飛ばすというふうにはならないのだが。春とは云え、様名湖の夜は寒い。こたつに入ったり、ふとんにくるまったり、時には他の方法で暖を取り、青春の一夜を若者らしい真剣さで語り明かすうちに、云われぬ親しみ近づきが生まれるのである。メンバーは、毎年新卒が加わるし、常連がその友人を連れて来たりして固定化しないので年毎に感じが変わる。その常連の友人が常連になったり、大学のある九州から帰京して来る男もいるし、大

学の授業を自主的に休講して参加する者もある、そんな魅力をこのOB会、そのメンバーは持っているのです。2泊3日の合宿の終わりに、何か別れ難い気持ち起きるのは私だけではないでしょう。

OB会という名は付かないが、現役の音楽部員との交流する機会としての文化祭、コンパ、普段の活動のときに卒業生が数多く集まり、帰りに喫茶店で話したり赤提灯に誘われたりすることもある。私が先輩とのつながり、その良さを認識したのもそういった時(前文の前者の方)、高校一年の夏であった。OB会は、音楽部に於ては、現役の指導に当り、その活動のバックアップをするという性格も多分に持っている、そこに人同志のつながりが縦に構成され、それがOB会になって横に意識が変わる。そしてそこでやはりその人と人との間の交わり合いに自分を見出す喜びは尊いものである。それが、長い間、否、いつまでも続くのは、高校時代、各々の人がクラブの中で精一杯青春を燃やしていたからだろう。そして、その後も常に変化し向上しつつある人が多いから鼻につくこともなく新鮮な感情で会い別れることができるのだら。

高20期 田中憲太郎

庭球部 OB 会

現在のOB会は、会員数は300名で、名誉会長に松吉利夫氏(現九段高校校長・高体連男子庭球部部長)、会長に佐々木隆一郎氏(高3)、顧問に現在大泉高校教諭の橋本先生、土屋先生、細川先生、小林先生にお願いしている。幹事は卒業後3年目に当る卒業生が交替で務めている。OB会としての行事の一つに、例年5月5日に行なわれているOB会総会があり、昭和42年には48名、43・44年には28名のOB・OGの参加のもとに午後一時より開催された。今年は都合により延期された。この会は、日頃テニスから遠ざかっておられるOB・OG諸兄弟が一同に集まり、(大学その他で現在も活躍中のOB・OGもいる)、春の一日をテニスをしたり、昔話に思い出の花を咲かせたり、各自の近況等を語り合ったりしながら楽しく過ごすための会である。当日の現役生の協力を得て、午前10時頃にはコートを用意ができ、集まって来ているOB・OGに現役生を加え、各自思いのままに練習を始めている。そして一時頃からは適当にチームを組んでOB同志でゲームをしたり、現役生と交歓試合をしたりテニスを楽しんでいた。やがてほどよく運動し、疲れ、お腹

も空いてきた頃には、校舎内の一室を借り、寿司・ビール・菓子等を用意し、茶話会形式の会が始まる。ここでは各自の自己紹介を中心に近況や昔話等を語り合う。その中には、庭球部発足当時の苦心談とか各年代の活動状態等、OB会総会ならではの貴重な話が聞かれる。

そして幹事の仕事には、OB会総会の準備の他に現役生の技術のコーチがある。特にテニスの場合には、その性質上現役生同志の練習より、OBが練習に参加してその相手をしながら技術的に、また精神的にいろいろと助言したほうがはるかに効果的なのである。特に現役生の夏期合宿練習とその前の強化練習の期間には、多くのOBがきて、現役生の活動状況をみたり、その練習相手となりいろいろとコーチしてくれる。そこで幹事を中心に、主任コーチを決め、2名が現役生と寝食並びに活動を共にし、他の多くのOBの協力を得て、その練習をより効果的に行なえるようにしている。また、これらのOBの経済的負担を少なくするようにOB会として、他の会員に財政的な援助を求めている。そしてOB・現役生一体となつての夏期合宿では、現役生に多大な効果を上げ、OB相互の親睦をさらに深め、庭球部OB会の意義を再認識させられるものである。高19 田村洋一

放送小委員会 OB 会

去る4月25日(土)、虎の門の「赤トンボ」において、第2回JOBCのOB会が開かれた。「J.O.B.C.」というのは、Japan Ōizumi Broadcasting Committeeの略だと思っていたところが、一先輩のお葉書に、Japan Ōizumi Bokenasu. Club. であると書かれてあった。どうも、後者の方が、真実ではなからうか、という気がする。

大泉の放送は、他校とは異なり、小委員会ではあるが、クラブ的要素を脱せないのは、今も以前も変わらないようである。このことが、OB会を開こうと考えた原因でもあったと思われる。

昨年の卒業生が中心となり、OB会の準備を始めた。多くの先輩方から、賛成の声がきかれ、無事に第一回目のOB会を終了し、毎年4月第二日曜に開くことに決まった。

ところが、今年、すぐに第二回目の会の時期になったが、まだ幹事も不慣れなもので、なかなか場所が決まらず、来日も、電話帳を調べ、問い合わせたりで、大変だった。土曜日にしたのは、日曜日にわざわざ出かけて来るよりも、かえって学校なり会社なりの帰りに気軽に寄る、という形にした方が良かったらうという意図からである。

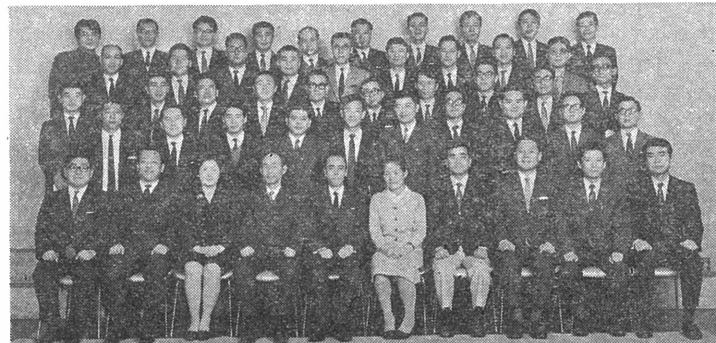
当日は、あいにく雨。これでは集まりが悪いだろうと心配したが、顧問をしていただいている石井先生、以前、顧問でいらした中山先生(現戸山高)のおふたりをはじめとして、

通 信 欄

“高3同期会”開催

去る3月27日、高3同期会が、松井、本田の両先生と前田さんを迎え新橋のcockdrollサロンドで盛大に開催された。(出席者写真)

1年半ぶりの会とあって、約50名の級友が、バイキングを興味しながら、思い出や、現況、そして折悪しく欠席した友の消息など、話に花を



かな交歓の場に終始した。(中山茂雄)

咲かせた。

感激は前田トメさんの出席。「20年前は坊やだった皆さんが、今ではこんなに立派になって、なお私を忘れずに同席させて下さり有難うございます。大泉は皆さんのふるさとと同じ様なものですが、私にとっては、生涯の場です。」と感涙にむせびながらのスピーチ。紅一点の浜田(旧姓宮崎)女史もこられ、会場はなごや

かな交歓の場に終始した。(中山茂雄)